様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年３月３１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520428
研究課題名（和文）韓国・中国の学校英語教育現場における教師の動機づけに関する基礎研究

研究課題名（英文）Fundamental Research with Regard to English Teachers' ELT Motivation of Classroom Context in South Korea and China

研究代表者
木村　裕三（KIMURA　YUZO）
富山大学・大学院医学薬学研究部（医学）・教授
研究者番号：80304559

研究成果の概要：初等・中等教育段階における英語教員現職研修の内容と，その研修に参加した英語教員の授業との関連性を分析軸とし，英語教員の英語授業に関する動機づけについて，社会・文化理論を理論背景にしながら韓国初等学校 1 校，中国初級中学 1 校，高級中学 2 校の英語教員合計 4 名の授業について調査・分析を実施した。その結果，韓国，中国のいずれ国においても，初等・中等教育段階の英語教員への研修が整備されており，特に若手英語教員への手厚い制度の現状を記録できた。とりわけ北京市では，各学校単位で実施される校内研修が英語授業を構築する上で，英語教員の動機づけを有効に支援していることが判明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,800,000	0	1,800,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	480,000	3,880,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語教師・英語学習の動機づけ，社会文化理論，質的動機づけ研究

１．研究開始当初の背景

本研究の先行研究である，科学研究費補助金研究（研究課題 16520337「韓国・中国における学校英語教育政策に関する基礎研究」）では，英語教師の授業観・学習観といった暗黙知を，インタビューの発話データを解釈し，教室内の授業実践と，国家の英語カリキュラムとの関連性を探求した。その成果から，以下の点がすでに研究背景として明らかになっていた。

(1) 韓国の初等学校，中学校，高等学校の授業実践が，生徒の能力水準ごとに到達度を細かく規定した，第 7 次教育課程という国家カリキュラムをよりどころとして見事に展開されていた。
(2) 北京市の小学，初級中学，高級中学の実践についても，2003 年に試行が開始された「英語課程標準」という中国の英語国家カリキュラムに沿った実践が各教師の実践を支えていた。

その上で，この先行研究の期間内では探求できなかった，以下の新たな課題（２．研究の目的）が浮上してきた。

２．研究の目的

(1) 2004 年 8 月に京畿道の地方自治体が開始した，英語村（English Village）という英語イマージョン教育施設が，学校英語教育に

対してどのような影響を及ぼしているのかを究明する。また，韓国では，急速に変化する社会へより敏速に対応するため，これまで5年ごとに改訂されていた国家カリキュラムを，より柔軟に変更できる「常時教育課程」の時代に入っている。この状況下，各初等学校に取組みが課されている「英語学習センター」の設置と，その有効利用の実態を調査し，英語村プロジェクトと併せて，教室における正規の英語教育だけでなく，これらいわば「非正規」の英語教育が，教室内の英語教育に与えている影響を探求する。

(2)京畿道教育庁第二庁が主催する新しい初等学校英語教員向け研修の実態を調査し，この研修に参加した初等学校英語教師の授業実践を分析し，初等学校英語教師の英語教育に対する動機づけを究明するとともに，教員研修が初等学校英語教師の授業への動機づけにどのような影響を与えているのかを探求する。

(3)北京市海淀区の海淀教師研修学校で実施されている区内初級・高級中学英語教師向けの現職研修の実態を調査し，この研修に参加している初級中学英語教師の授業を分析することにより，教員研修が英語教師の授業への動機づけにどのような影響を与えているのかを探求する。

(4)北京市海淀区内の初級中学，高級中学と，内モンゴル自治区シリンホト市の高級中学の学校内における授業前検討会の実態を調査し，この授業前検討会の内容が英語教師の授業への動機づけにどのような影響を与えているのかを探求する。

３．研究の方法

(1)京畿道英語村（English Village）を訪問し，聞き取り調査を実施する。また，英語村のある地区の初等学校，中学校，高等学校を訪問し，各学校からの英語村への生徒の参加状況と，英語授業への影響を調査する。

(2)京畿道教育庁第二庁を訪問し，京畿道下の初等学校英語教師向けの教員研修について調査を行う。その上で，本研究にとって有効であると思われる研修について実際に参観を行い，京畿道が現在どのような新しい英語教師向けの研修を実施しているのかを精査する。

(3)北京市海淀区の海淀教師研修学校を訪問し，研修学校主催の現職初級中学英語教師向け研修に参加し，その実態を調査する。

(4)以上の調査を終えた上で，韓国，中国の各学校を訪問し，対象となる英語教師の授業を参観，記録する。その方法は図１のとおりである。

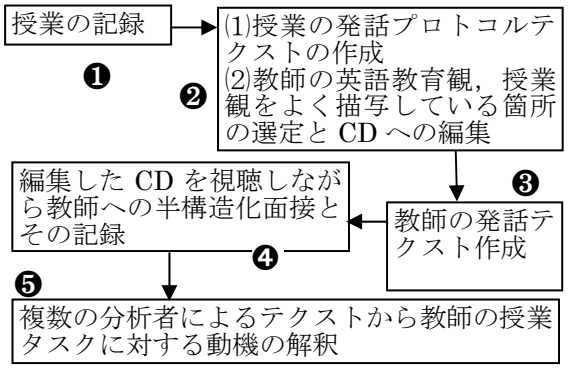

図１：授業分析（発話データ解釈）方法

４．研究成果

(1) ほぼ 5 年ごとに改訂されてきた韓国の教育課程は 1997 年の第 7 次教育課程施行以来改訂を見ていない。それに代わって，現在は，教育課程の内容を随時改善することにより社会の変化に対応していく「常時教育課程」の時代となっている。

「常時教育課程」時代の韓国英語教育において特筆すべき出来事の一つは，2004 年 2 月 17 日に発表された「私教育費軽減対策」である。これは，英語教育ブームに伴う私教育費支出によって家計の負担が逼迫する社会問題を解消し，併せて学校教育の機能回復などを目標として公表された 10 項目にわたる推進課題である。このうち放課後補習学習の充実として，①英語キャンプの運営，②英語体験学習センターの設置，③ネイティブ補助教員の配置拡大，④初等学校英語科教員のための深化研修拡大という四つの施策が全国的に展開されている。①はネイティブ補助教員や深化研修修了の英語教師，父母など多様な教師を活用し，学校など現実的施設を利用して，低コストで英語イマージョン活動を運営する企画である。2005 年度は 8 万人程度であった参加者が，2006 年度は長期休暇中に多く実施された結果 30 万人に増加した。②は施設や予算を地方自治体が支援し，市や道教育庁，あるいは各学校が運営する施設である。高額な私塾とは異なり，既存の教育庁や学校の施設，あるいは廃校になった学校を改装活用し，優秀な教師を起用して質の高いプログラムを廉価で提供することを目指している。教育人的資源部は 2006 年度から１，２年を対象に 50 校の初等学校を選定し，2800 万ウォンを支出して，学校内に英語体験施設を作り，全校生徒が利用できるようにしている。③は韓国の学校英語教育現場でネイティブ補助教員の採用を増化する動きである。韓国でネイティブ・スピーカーのリクルートにあたっている EPIK プログラムによれば，2001 年 53 名であった新規雇用ネイティブ補助教員数は 2003 年以降毎年

100 名を超えており[1], 2007 年は約 250 名が見込まれている。④については，各市・道教育庁が現在独自の研修内容を企画する事例が見られる。

一方，京畿道英語村構想は前京畿道知事の孫鶴圭（ソンハッキュ）氏が 2002 年の知事選挙の公約として「英語村」設立を掲げたことに始まる。韓国初の地方自治体政府主導の大規模英語イマージョン施設の一つ，坡州キャンプは 84，000 ㎡の敷地内に 550 名を収容できる 1 万㎡の施設を建設し，100 名の英語圏ネイティブ教員と 50 名の韓国人バイリンガル職員を雇用して運営にあたっている。商業施設には非英語圏の外国人スタッフを雇用し，多様な英語を提供できる条件も整えている。英語圏ネイティブ教員の中には，単に英語教育の学位だけでなく，音楽，芸術，科学といった専門領域の学位を持っている教員[2]も存在し，ミュージカルやドラマの制作，科学実験の実施を担当する。

年間を通して稼動しているプログラムは８つある。そのうち初等学校・中学校生徒関係のものはは①初等学校生徒向け週末宿泊プログラム（3 年生以上，京畿道内生徒約 7,300 円, 京畿道外生徒約 14,000 円），②学期中 1 週間プログラム（京畿道内中学 2 年生向け，2007 年 3 月より約 7，300 円から 14,000 円に値上げ），③長期休暇中２週間プログラム（初等学校 5 年生～中学校 3 年生向け，約 73,200 円），④英語村 1 日日帰り体験プログラム（初等学校から一般まで）の４つである。この中で，②の 1 週間プログラムへ京畿道教育内の中学生が参加する場合，京畿道教育庁が一括して募集・選定し，500 名の中学 2 年生を毎週送り込んでいる。また坡州市教育庁と京畿道英語村坡州キャンプの間で，坡州市内 12，000 名の児童・生徒の短期プログラム参加特別枠も取り決められ，1 週間プログラムに毎週 300 名の初等学校児童を受け入れ，放課後プログラムには 4 ヶ月間約 7,300 円で公立学校の生徒の受け入れを実施している。

英語村における英語教育の意義は，公立学校の英語教育では実感できないいイマージョン体験と考えられる。学校英語教育の場合，教室内で教科書を使って教科として学習する限り，英語によるコミュニケーション活動には限界があるが，英語村では全ての時間が英語を介した活動となっており，韓国国内に居ながら英語圏留学と同じ効果がある，というのが英語村運営者側の見方である。

公立学校側の意見もおおよそ英語村の意見に合ったもので，例えば，坡州市새金（セグム）初等学校からは，2006 年度 384 名の児童が英語村のプログラムに参加したほか，英語特別クラスの 28 名の児童が英語村のスピーチ大会を経験した。また，冬休みの英語キャンプの一環として 65 名の児童が英語村の「博物館体験」プログラムや「おもちゃ展示館体験」「クッキー体験」等のプログラムに参加した。これらの実績に対し，沈点順(シムジョムスン)校長先生は，模擬英語圏空間の中で外国人と英語で活動をすることにより，これまで学校内で学習してきた内容を実際に使ってみることができ，初等学校の英語教育に一定の好影響を与えていると指摘する。また，奉日川（プムイルチョン）中学では，2 月 5 日から 1 週間, 2 年生 200 名が英語村の 1 週間プログラムに参加した。その様子を英語科の金蕙貞（キムヘチョン）先生やネイティブ補助教員の Robert Peel が確認したところ，ドラマの制作や科学実験を英語で体験することは学校ではできないことであり，とても有意義だったという感想が聞かれたとのことである。

ただ，課題も少なくない。その 1 つが公立学校の児童・生徒が参加する体験費用の高さである。京畿道英語村の運営費用は現在京畿道庁の全面的な支援により成り立っている。しかし，2006 年 2 月現在で約 200 億ウォン（約 24 億 4000 万円）の赤字である。坡州キャンプでは道庁からの財政的独立を目指し，上述のとおり今年度 3 月より大幅な値上げに踏み切っているが，これが参加費増額に跳ね返る結果となっている。果たしてこれだけの費用に見合った効果があるのか，道民の間には疑問視する意見も寝強い。

(2) 韓国の初等学校英語担当教師の現職教員研修については 120 時間の基礎・深化研修が知られている。この研修は韓国初等学校英語教員の英語運用能力の向上に一定の成果を与えてきたものの，近年では，各地方の教育庁主催の新しい研修が実施されている。その事例を京畿道教育庁主催の一連の研修に見てみる。

まず第一に，10 日間で 80 時間，40 名の京畿道北部初等学校英語教師を対象としてソウル市の淑明女子大学校グローバル人材センターが担当して実施される「グローバル・エリート英語教師養成研修」が挙げられる。この研修は，英語を母語話者の所有言語ではなく，国際共通語として捉える国際理解マインドの醸成に大きな狙いがあり，併せて英語運用能力と教授スキルの向上も目指している。したがって研修

[1]具体的には 01 年 53 名，02 年 75 名，03 年 102 名，04 年 104 名，05 年 132 名，06 年 117 名。

[2]英語村内では Edutaner と呼ばれる教員。

内容も異文化理解と教授法の２本柱で構成され，前者には①異文化理解，②世界の文化圏別外国語教育現状理解（主として東南アジア，ヨーロッパ，アフリカ，南米，アラビア語圏），③中国・日本の外国語教育の現状紹介が，そして後者には①ドラマの作成とロールプレイ，②CALL，③ゲームとチャント，④TPR，⑤Story telling が用意されている。担当講師には英語教育や外国事情を専門とする大学教官のほか，2008 年の研修では筆者も日本の英語教育事情を１コマ講義する機会を得た。

一方，もうひとつの研修は，ほぼ時期に展開される「初等教師英語ドラマ研修」である。これは，ドラマの制作を通して初等学校児童の英語学習の動機づけと教員の英語運用能力の向上を図ることを目的としたもので，京畿道教育庁第２庁の初等学校英語教育に対する斬新なアプローチの証左と言えそうである。募集人数はやはり 40 名の初等学校英語担当教師で，20 名ずつ 2 つのグループに分けて 10 日間計 60 時間かけて実施される。その研修内容は，演劇を専門とする大学教官がドラマの基礎理論を担当し，現役の劇団俳優による演技・衣装の基本指導が実施された後，「英語ドラマの効果的指導法」と「人形劇製作とその指導法」についてそれぞれの実践例を２つの初等学校の英語教師が紹介する。その後，ネイティブ補助教員も参加し，23 時間をかけて各グループで台本，小道具，衣装を製作し，最後に評価を兼ねて実演が行なわれる。

３つ目がソウル市江東（カンドン）区にある国際教師教育院(Teacher Training Institute International)に委託して実施する，4 日間，計 28 時間の研修である。この研修は，英語運用能力と授業スキルの向上に特化した内容で，Screen English（映画を題材にしたリスニング力向上と英語圏文化理解の授業。午前中 2 コマ，計 3 時間×4 日）と授業実践のアイデア創出のためのテーマ別ワークショップ（Food & Health を主テーマとし，教室実践にすぐに役立つ内容のワークショップ。午後 2 コマ，計 4 時間×4 日）の二本立てである。担当は全員が国際英語大学院大学のネイティブ教員とバイリンガル韓国人教員である。

研修初日のプログラムに受講生とともに参加したが，午前中の Screen English の授業では，講師の Glenn Allies 氏が *Bridget Jones's Diary*（『ブリジット・ジョーンズの日記』）を素材に，語彙，発音，構文，英国文化理解の指導を行なっていた。授業の質のレベルが高く，受講生教員の英語による応答も非常に活発であった。

(3)北京市海淀区教師研修学校は，北京市海淀区内の小学，初級中学，高級中学を管轄下に置く教師の研修に特化した教育機関である。このうち，初級中学と高級中学の英語教師研修を担当している英語教員教育研究部門（英語教研室）では，海淀区内約 70 の初級中学，高級中学の現職英語教師を対象として研修を実施している。研修は①臨時的な研修，②新任教師研修，③平常研修，④海外短期留学研修に分類でき，このうち主要となっているのが平常研修である。

平常研修はさらに①教材使用法・教育方法研修，②授業見学研修，③中堅教師研修に分類できる。教材使用法・教育方法研修は文字通り英語の教科書の使用方法についての研修で，海淀区の初級・高級中学 6 学年を学年ごとに 1 名の訓練教師が担当する。1 学年当たりおよそ 100～200 名，6 学年全体で約 600 名～1200 名の教師の出席があるという。研修時間は毎週火曜日午後 2：00～3：30 の 90 分（2 時限）。月 4 回開講されているが，受講生はこのうち 2 回を受講すればよい。従って新学期（9 月～1 月）10 回で「教材上」を，後期（3 月～7 月）10 回で「教材下」の使用方法を，現場の授業の進度に合わせる形で担当している。

2007 年 5 月 15 日に，教材使用法・教育方法研修に，また，2007 年 10 月 16 日に，北京十一中学で実施された，海淀教師研修学校主催の授業見学研修に参加した。教材使用法・教育方法研修では，英語教研室の訓練教師，胡小力先生が研修を取り仕切り，依頼を受けた区内初級中学の英語教師が教科書の活用方法や，授業の進め方の事例を紹介しながら，参加者の授業実践へ役立つ講義を実施していた。一方，授業訪問研修では，十一中学の初級中学 1 年生の授業が公開され，参加者が実際の授業展開を参観することによって，講義だけではわからない実際の授業展開事例を参考にできるシステムが完備されていることが判明した。

図２：北京市海淀教師研修学校研修風景
（右：胡小力研修担当訓練教師）

(4)①韓国高揚市一山区城底初等学校
李恩影先生(이은영선생님)授業実践

2 年 1 組学級担任，初等学校教員歴 3 年目，城底初等学校 1 年目，専攻は国語教育

英語研修歴：2006 年夏期 60 時間基礎研修修了（高陽市教育庁主催），2007 年 3 月 30 時間英語教授法研修修了，2007 年夏期 120 時間深化研修修了（京畿道教育庁主催），2008 年 1 月 80 時間グローバル･エリート英語教員研修修了（京畿道教育庁主催）

授業日時：2008 年 6 月 4 日（水）10:00-10:40
授業クラス：2 年 1 組男 19 女 16，計 35 名
テキスト：*Nock Nock English* Level 3 （城底初等学校開発教科書）Unit 3 “Big Red Bus”
授業形態：6×6 グループ
授業展開

導入 3 min.	ビデオによる導入 “What do you want?”
展開 27 min	目標・活動 Goal: “I can speak transportation name.” Activity 1: Let’s sing a song. Activity 2: Let’s play the game. Activity 3: Let’s play the picking game
まとめ	単語のマッチングと筆記 Guessing game

半構造化インタビュー：2008 年 9 月 26 日
分析結果
授業場面を Stimulated recall の素材として見せながら，半構造化インタビューを実施した。その結果，以下の点が浮き彫りになった。
・大学の専攻が国語であるにもかかわらず，英語に対する興味の強さそのものがこの英語教師の動機の根幹を形成していることが判明した。その上で，所属する初等学校が，英語教育の研究開発校であり、最も若い教師である自分自身がその研究に携わらなければならないという外発的動機づけも自身の授業を支えていることがうかがえた。
・李先生は、自身の英語をもっと上達させ，子どもたちによりよい英語の発音に触れさせ，上達を助けたいという向上心が強い。この向上心こそが，李先生の英語授業実践への大きな動機を形成していることが判明した。そのための手段として，京畿道教育庁，高揚市教育庁主催の現職英語教師研修への参加は不可欠かつ効果的であるという認識であった。これは、韓国初等学校英語教育を支える研修制度が，若い英語教師にも受け入れられ，信頼されていると解釈できる。この点は，今後日本の小学校で英語が道徳のような「時間」ではなく，正規の「教科」として位置づくためにも極めて参考になる点である。

②中国北京市学院路中学
王　喆先生授業実践
1 年 5 組学級担任，初級中学教員歴 1 年目
授業検討会:2007 年 3 月 1 日(木) 9:56-10:56
授業日時：2007 年 3 月 5 日（月）10:20-11:05
授業クラス：1 年 5 組男 15 女 14，計 29 名
テキスト：*Go for it!* Grade 7, Book2, Unit 1, *Where is your pen pal from?*
授業展開

導入 2 min.	1 名の生徒のスピーチ クリスマスについてのスピーチ
展開 40 min	・Power Point による世界 14 カ国の説明 (What country is it? What language is spoken? How about people?) ・王先生のペンパルについての質問 (What is her name? Where is she from? What is her favorite movie?) ・王先生が生徒のペンパルについて質問 (Do you have a pen pal? What is her name? Where is she from? etc) ・Pen pal pair task → Presentation ・Exchange student task → Presentation ・Making a report task → Presentation
まとめ	Homework assignment, 3 min.

半構造化インタビュー：2007 年 10 月 18 日
分析結果
授業場面を Stimulated recall の素材として見せながら，半構造化インタビューを実施した。その結果，以下の点が浮き彫りになった。
・北京市の海淀教師研修学校主催の教師研修と，王先生が勤務する学院路中学の 8 名の英語教師による授業前検討会の双方が，新任英語教師の授業への動機づけに大きな役割を果たしていることが判明した。具体的には，海淀教師研修学校での教材使用法・教育方法研修は，王先生に教科書の一般的活用方法を考える上で大きな助けとなっており、その上で，学校内の同僚との授業前討論会では，自分の学校の生徒の実情に合った授業実践を展開する上で自身の実践を精緻化する助けとなっていた。そのいずれもが若い王先生にとっては不可欠であると思われる。

③内モンゴルシリンホト市錫盟第二中学
任　紅　娟　先生授業実践

2 年 5 組学級担任，高級中学教員歴 16 年目

継続教育歴及び英語研修歴：1992 年内蒙古包頭(パオトウ)師範専科大学卒業，1993～1996 年内蒙古師範大学通信教育課程修了（教員資格充当），2004～2006 年首都師範大学外国語学院大学院修士課程英語教育専攻

授業検討会:2007 年 5 月 17 日(木) 10:15-10:50

授業日時：2007 年 5 月 18 日(金) 10:00-10:45
授業クラス：2 年 1 組男 29 女 31，計 60 名
テキスト：*Senior English for China*Book2B
Unit 17, *Disabilities*,
Reading, “Disabled? Not me!”

授業展開

導入 2.5 min.	任先生が有名な disabled people の事例を生徒に尋ねる タイトルから英文本文の内容を推測
展開 40 min	・本文の速読→本文全体の Main Idea 把握 ・Paragraph Reading Listening to the tape → Main idea elicitation → Main idea modification → In depth understanding → Sentence recitation → Comprehen- sion Questions ・Group Discussion *How should we treat disabled people?*
まとめ	Homework assignment　2.5 mn.

半構造化インタビュー：2007 年 10 月 22 日
分析結果
・任先生の英語教育への動機づけの根幹を形成しているのが，この先生が初級中学の生徒時に出会った英語教師であることが判明した。具体的には、この初級中学時代の英語教師の授業によって英語に自信がつき、さらには教育者として英語のすばらしさを若い次世代の生徒に伝承したいという強いへと繋がっていった。このことは，本研究の先行研究（科学研究費補助金研究，研究課題 16520337「韓国・中国における学校英語教育政策に関する基礎研究」）の結果とも一致する。つまり、尊敬する英語教師との出会いが英語教師の授業実践への動機づけを支える一つの共通項目であると考えられる。
・任先生の首都師範大学英語教育修士課程における研修は，新採用から一貫して同じ学校で勤務し，英語教育に対して枯渇状態に陥っていた時期に，自身の専門知識と生活を一新するために選んだ選択であることが判明した。しかし，この修士課程修了により，任先生の英語授業実践への動機づけが，一段「高み」に昇ることができたことが，活動理論（Activity Theory）を基にした分析から解釈することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①木村　裕三「韓国学校英語教育を支える教師の動機づけ：社会文化理論による質的データの読み取り」『ヴィゴツキー学』第 9 巻，11－28，2008，審査無
②木村　裕三「ポスト第 7 次教育課程下の韓国学校英語教育＜下＞」，『英語教育』，56 巻 10 号，52－55，2007，審査無
③木村　裕三「ポスト第 7 次教育課程下の韓国学校英語教育＜上＞」，『英語教育』，56 巻 9 号，52－55，2007，審査無
④木村　裕三「日本もこんな英語教育政策を：韓国・中国の英語授業とそれを支える政策」,『英語教育』, 55 巻 9 号 68－75, 2006, 審査無

〔学会発表〕（計 6 件）
①Yuzo KIMURA, Language Teaching/Learning Motivation in China in View of Sociocultural Theory, The 43rd Annual TESOL Convention and Exhibit, 2009/3/26, Denver, Colorado, USA.
②木村　裕三「新しい韓国現職初等学校英語教員研修と授業実践の関係：初等学校英語教師の動機と自律を支えるシステム」第 33 回ＪＡＣＥＴ全国大会，2008 年 9 月 5 日，早稲田大学
③Yuzo KIMURA English Language Teaching/ Learning Motivation in Secondary School Classrooms in Beijing: Interpreting Qualitative Data from Sociocultural Theory, The 6th Asia TEFL, 2008/8/5, Bali, Indonesia
④木村　裕三「韓国における第二言語習得―社会文化理論で読み解く韓国学校英語教育：教師の動機の構成－」，ヴィゴツキー学会第 9 回大会，2007 年 11 月 3 日，神戸市勤労会館
⑤木村　裕三「英語教師の動機づけ－質的データによる北京市，韓国仁川市小学校英語実践の読み取り」，第 33 回全国英語教育学会大分研究大会，2007 年 8 月 5 日，大分大学
⑥木村　裕三「中学校英語教師の動機づけ－韓国第 7 次教育課程下の英語授業の成功要因－」JACET中部支部大会，2007 年 6 月 9 日，石川県立大学

６．研究組織
(1)研究代表者
木村　裕三(KIMURA YUZO)
富山大学・大学院医学薬学研究部・教授
研究者番号：80304559
(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
韓国
城底初等学校　李　恩影　先生
中国
学院路中学（北京市）　王喆　先生
民族大学附属中学（北京市）　馬莉　先生
錫盟第二中学（内モンゴル自治区シリンホト市）　任　紅　娟　先生